様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間： 2007～2009
課題番号：19530442
研究課題名（和文） 東欧多民族国家の民族問題と統治構造

研究課題名（英文）National Question and Power Structure in Eastern Europe as Multinational Countries.

研究代表者
材木 和雄（ZAIKI KAZUO）
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
研究者番号：70215929

研究成果の概要（和文）：
第一次世界大戦の結果、東欧ではユーゴスラヴィアのような多民族国家が誕生した。しかし、そこでは各民族のナショナリズムが常に不安定要因を構成し、一つの国民としての結束を妨げた。この研究では、この国の民族問題の特徴と支配層の対処の失敗を把握した上で、第二次世界大戦中のユーゴスラヴィア王国崩壊に至る過程、共産党の指導によるパルチザン運動の展開と民族問題への対応､それらが戦後の統治構造へ与えた影響を考察した。

研究成果の概要（英文）：
As the result of the First World War, the complex multiethnic state such as Yugoslavia emerged in Eastern Europe. The hallmark of this state was remaining narrow-minded nationalism which always constituted of destabilizing factor in domestic politics. This study firstly described the failure of the ruling elite in solving national question during interwar period. After that, it traced the process of the collapse of the Kingdom of Yugoslavia and examined the meaning and effect of the Partisan movement led by the communists during the Second World War.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：ユーゴスラヴィア王国、クロアチア人とセルビア人、パルチザン運動、共産党、ユーゴスラヴィア内戦

１．研究開始当初の背景

周知のように 1990 年代前半にユーゴスラヴィアでは悲惨な内戦が発生した。東欧革命による社会主義の崩壊が戦争を伴ったのは

この国だけであった。その理由を解明するため、「ユーゴスラヴィアの解体はなぜ、どのように起きたのか」という問題の分析に多くの研究者が取り組んだ。

その結果、様々な研究が国内外で発表された。ユーゴの解体要因をめぐる論争の整理を試みたある研究者は、これらを①「民族対立」説、②「経済危機起因」説、③「チトーイズム（この国のカリスマ的指導者であったチトーが構築した独特の思想と体制）の崩壊」説、④「外国の介入」説の４つに分類している。私自身もこの問題に取り組み、「民族対立」説に分類される研と「チトーイズムの崩壊」説に立った研究を発表した。

私見によれば、ユーゴスラヴィアは「国家制度をめぐる対立の解決」を宿命的な課題とした国であった。かつて私はこう書いた。「多民族国家のユーゴにとって最大の不安定要因は、この国の二大民族であるセルビア人とクロアチア人が国家形態をめぐって相容れない政治志向を有していたことであった。歴史的にいえば、ユーゴが中央集権国家の形態をとり、セルビアがその覇権を握っていた時代には、クロアチア人の政治家は連邦主義的な要求をかかげて激しい政治闘争をおこなった。だから大戦間期の大きな問題は『クロアチア問題』であった。しかし、共産党の指導のもとに戦後に再生したユーゴが連邦制国家を採用したとき、セルビアとセルビア人の処遇が大きな問題になった」。経過は省略するが、ユーゴは国家制度をめぐる問題に決定的な解決策を見いだせず、1991 年に解体した。

しかし、このときの私の研究は国制問題の歴史的な起源と展開を十分に踏まえていない点で、この国の民族問題の深層を把握できていない部分があった。そもそもユーゴスラヴィアは単なる地域の名称ではない。それは、別々の国家に居住していた南スラヴ人を一つの国家に統合しようとする思想であり、運動であった。ところが、この国の構成民族はそれぞれ強烈なナショナリズムをもち、苛烈な民族間衝突が起きた。このことを考えると、そもそも「ユーゴスラヴィアという国がなぜ二度も成立したのか」も疑問として提起される。それゆえ、その後の私の研究はこの国の建国の経緯、ならびに大戦間期の国家制度をめぐる民族対立の分析に向けられた。その結果、支配層が複合的な国家編成の必要性を認めず、共通の国民意識を形成できなかったことが戦前期の最大の問題点であることを指摘した。

次なる課題は、戦前の失敗を教訓とする戦後の共産党政権が国制問題にどのように対処したのかを総括することであった。戦後ユーゴの相対的な安定に関しては、諸民族の相反する要求を抜群のバランスで政治的に処理したチトーの指導力が大きく、その死はこの国の解体を促進した。しかし、この国の安定はたんにチトーのカリスマな権威によるものではなく、巧妙な統治の仕組みに支えられていたというのが私の主張である。

諸民族の同権を原則としながら、チトーの政策は当初からセルビア人に妥協的な側面があった。それはパルチザン陣営を強化するためにセルビアの民族主義運動を取り込んだためであり、その結果、戦後の国家でもセルビア人優位の要素は温存された。それゆえ、戦後政権がどのような統治の仕組みでナショナリズムを統制してきたのかを分析し、そこにはどのような歪みがあったのかを明らかにしなければならない。これを達成して初めてユーゴスラヴィアの解体要因の本質に迫ることができる。このように考え、新たな研究計画を立案し、この公募に応募した。

２．研究の目的

東欧の諸民族は第一次世界大戦後に各地で独立国家を樹立した。その中にはユーゴスラヴィアのような複雑な多民族国家が含まれていた。このような国家では、ある多数派の民族が支配民族となる一方で、その他の民族が被支配民族の地位に置かれ、新しい対立関係を発生した。

大戦間期にこれらの地域では諸民族間の相剋するナショナリズムが常に内政の不安定要因を構成し、一つの国家の国民としての結束を妨げた。この結果、第二次世界大戦中には枢軸国はこの地域を易々と支配下に置いた。それゆえ、戦後の共産党政権にとっては、諸民族を融和させ、民族対立の再燃を抑制することが体制の安定のために不可欠の作業となった。

本研究は、ユーゴスラヴィアを対象に、東欧に生まれた多民族国家が建国以来、どのような民族問題に直面し、これにどのような解決を与えたのか、それはどのような問題をはらみ、1990 年代の内戦につながったのかを明らかにしようとした。

３．研究の方法

毎年現地を訪問して、現地の研究者や関係者に聞き取りをおこない、文書室や図書館で各種の文献・資料を収集してきた。これを帰国後に読了・整理し、研究論文にまとめ上げることが主要な研究方法である。

現地訪問の実績は次の通り。

2007 年度：7 月にクロアチア共和国ザグレブ大学哲学部・国立図書館を訪問、12 月にセルビア共和国ベオグラード大学哲学部・国立図書館とクロアチア共和国ザグレブ大学・国立図書館を訪問

2008 年度：7 月にクロアチア共和国ザグレブ大学哲学部・国立図書館を訪問、12 月にク

ロアチア共和国ザグレブ大学哲学部・国立図書館、コプリヴニッツァ資料室を訪問、フランクフルト大学法学部文書館を訪問。

2009 年度：7 月にセルビア共和国ベオグラードの国立図書館と NGO、クロアチア共和国ヴコヴァールとオスイェクの NGO、ザグレブの国立図書館を訪問。12 月にセルビア共和国ベオグラードの NGO、クロアチア共和国のリイェーカとスプリットの NGO、フランクフルト大学法学部文書館を訪問。

４．研究成果

この間の研究については、４編の論文を執筆し、うち３編を公刊した。全体を通して、特筆すべき研究成果と考えるのは次の点である。

(1)ユーゴスラヴィア王国の解体の要因

第二次世界大戦後に社会主義連邦国家が成立した背景的要因を探るため、1941 年 4 月の対独戦争とユーゴスラヴィア王国の崩壊に至る道を検証し、この国の軍隊の敗北と王国崩壊の原因について試論を提示した。すなわち、1941 年のユーゴスラヴィア王国の崩壊はセルビアに敵意をもつクロアチア人の裏切りが引き起こしたかどうかについてクロアチアとセルビアの研究者の間で論争があった。私は新資料に基づき様々な側面を検討した結果、国王と政府が早々と国外に脱出したことがこの国の崩壊に大きな影響を与えたと結論した。自分らの身の安全のみを考えた彼らの行為は見捨てられた国民の大きな反発を招き、パルチザン運動の拡大と共産党による権力の奪取を容易にしたといえる。

(2)占領初期の抵抗運動の性格

第二次世界大戦中に枢軸国によって占領されたユーゴスラヴィアには、二つの種類の抵抗勢力が存在した。パルチザンとチェトニクがそれである。社会主義の時代にはパルチザンは共産党に組織された全人民的な抵抗運動の組織であり、チェトニクは偏狭な大セルビア主義者の集団と見なされていた。ところが、近年セルビアとクロアチアで共にチェトニクとパルチザンの相違が相対化され、その同質性が強調されている。私は、新資料に基づいてクロアチアにおける抵抗運動の発生過程をたどり、その結果、①抵抗運動の初期には厳密な意味ではチェトニクもパルチザンも当初は実体として存在しなかったこと、②存在したのはセルビア人の蜂起集団であり、それは抵抗運動の展開の過程でチェトニクとパルチザンに分化したという仮説を提示した。

(3)ユーゴスラヴィア国家の不安定要因

この研究の結論としてこの国の解体を招いた要因を次のように総括した。第一次世界大戦後に建国された王制ユーゴスラヴィアは旧セルビア王国とその支配層が覇権を握る国家であり、彼らに抑圧された諸民族の不満が国家の不安定要因であった。これに対し、パルチザン運動を経て第二次世界大戦後に共産党が建設した社会主義ユーゴスラヴィアは民族同権の原則を打ち出し、民族共和国の連邦制を導入した。その下ではセルビアは覇権を失い、共和国の中に二つの自治州を設置された。チトーはセルビアを弱体化し、セルビア内のセルビア人とセルビア外のセルビア人とを分断することによりセルビアの覇権の復活を防ぎ、ユーゴスラヴィア国家を安定させようとした。このようなセルビアを犠牲にする統治は旧セルビア王国内のセルビア人に大きな剥奪感をもたらしたが、彼らの不満は長らくチトーの権威に圧されて表面化しなかった。1980 年のチトーの死後、セルビアの失われた権利の回復を訴えて民族主義運動を起こしたのがミロシェヴィイッチであった。自治州を廃止し、セルビア共和国の統一を回復したミロシェヴィイッチはセルビア外のセルビア人を運動に巻き込み、ユーゴスラヴィアにセルビアの覇権を樹立しようとした。これは、その他の民族共和国の反発を招き、連邦は解体の方向に向かった。その際、クロアチアとボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、ミロシェヴィイッチとユーゴスラヴィア人民軍の支援を受けたセルビア人勢力が武力によって領土を確保する行動を起こし、内戦が発生した。

(4)民族紛争後の難民の帰還問題

1990 年代の内戦に伴うセルビア人の難民化と戦後の帰還の状況を調べた。その結果、セルビア系住民の帰還を阻害してきた最大の問題は住宅問題であることが分かった。その場合、住宅の所有形態によって二種類の問題がある。

一つは公有住宅の居住権の問題である。クロアチアの都市部では住民の大半は公有住宅に居住していた。内戦前、この権利は法律によって特別に保護され、所有権に近い性格を有していた。しかし、内戦の間に居室を不在にしていたセルビア人は、クロアチア政府によって住宅の居住権を剥奪された。セルビア人が住んでいた居室は多くの場合にクロアチア系住民に割り当てられた。その後、政府は公有住宅の私有化を実施し、各居室をその居住者に優待価格で払い下げた。セルビア人が住んでいた居室も別の人物の私有財産となった。そのため、クロアチアの都市部でのセルビア系難民の帰還は著しく少ない。セルビア系住民が喪失した公有住宅の居住権の回復や補償は未だに解決の展望が見いだせない状況にある。

もう一つの住宅問題は私有住宅の問題である。これはさらに二つのタイプに分かれる。第一に内戦の期間中にセルビア系住民の私有住宅が破壊・略奪されたり、放火されたり

して居住できなくなったことである。第二に破壊や放火を免れた住宅が内戦後にクロアチア政府によって一時的に接収され、住宅を求めるクロアチア人に割り当てられたことである。当局の黙認の下で不法な占拠も起こった。住宅の再建と解放、元の所有者への返還は近年になってようやく大きな進捗が達成された。しかし、それが大幅に遅れたことは多くの難民を国内外の避難地ないし難民キャンプに足止めにし、劣悪な居住環境の下に置いたり、帰国を断念させたりする結果を招いた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
材木和雄、クロアチアにおけるセルビア系難民の帰還の障害と住宅問題－「失われた公有住宅の居住権」の問題を中心に、環境科学研究 4 号、査読有り、51-75、2009.
材木和雄、1941 年のクロアチアにおける抵抗運動の発生について、環境科学研究 3 号、査読あり、99-121、2008.
材木和雄、「1941 年 4 月戦争」とユーゴスラヴィア王国崩壊の考察、環境科学研究 2 号、査読あり、19-42、 2007.
〔学会発表〕（計１件）
材木和雄、クロアチアとセルビアにおける「クロアチア出身のセルビア人」、広島大学国際学術シンポジウム「差別・統合・共生―ヨーロッパの経験から日本を考える」、2010 年 2 月 13 日 10 時～18 時、広島国際会議場.

〔図書〕（計１件）
材木　和雄
広島大学平和科学研究センター編『松尾雅嗣教授退職記念論文集・平和学を拓く』（クロアチアにおける民族問題とセルビア人の地位、118-143 を執筆）2009 年

〔その他〕
ホームページ等
広島大学総合科学研究科紀要
http://www.hiroshima-u.ac.jp/souka/l/2/

６．研究組織
(1)研究代表者
材木和雄（ZAIKI KAZUO）
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
研究者番号：70215929

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：